研究プロジェクト

こころと身体をつなぐメディアとしての味覚研究：食の「質」をふまえた食教育の検討

荒牧麻子（女子栄養大学調理文化研究室非常勤講師）

■2年目の活動

2年目となる活動は以下の流れに沿った研究報告、海外学術交流、プロジェクト紹介を行った。

1）海外における味覚研究、味覚教育の理論と実践についての先行研究を消化するため研究会を行い、日本の子どもの「食育」の現状を世界の食教育の中に位置付けることを試みた。味覚の発達に関する基礎研究と味覚教育の方法論は、ヨーロッパ、とりわけフランスとイタリアで進んでおり、認知・発達心理学、栄養学、行動学、言語学、農学の学際的基礎研究に基づいた「味覚教育」が公立学校の教育現場において20年以上にわたって実践されているだけでなく、それが児童・生徒のその後の味覚形成に及ぼす影響について、豊富な実験資料が蓄積されている。そこでは、子どもの食行動を心理学、発達心理学、行動学、言語学的な側面から複眼的に研究されているが、われわれの目から見て抜けていると思われたのが生態学的視点と心理プロセスを念頭に置いた社会学的視点であった。

2）単純な質問紙調査が難しい幼児・児童を対象に、味覚をはじめとする感覚価値に関する質的研究をどのように進めることができるか、野外霊長類学や生態人類学の培ってきた行動・生態観察や動物心理学的手法を参考にしながら検討した。

■研究会開催及び報告会の実施概要

・2010年5月15日（土）　前年度の活動報告と新たな研究課題の意見交換会開催（東京）　参加者：鎌田、山内、川村、藤原、大石、荒牧

・2010年7月3日（土）　研究報告会開催（東京）　参加者：鎌田、山極、山内、藤原、荒牧

テーマ「食の質を問う」を各人の研究フィールドから話題提供

・2010年7月7日（水）　篠山フィールドでの野外活動研究の継続について意見交換（京都）　参加者：布施、荒牧

・2010年9月発行　定期刊行物『こころの未来』vol.5に当研究プロジェクト概要紹介

・2010年9月12日～18日　国際霊長類学会への参加（京都）

・2010年11月11日（木）　鎌田教授研究室主催「こころ観研究会」への参加（京都）　荒牧

・2011年2月7日（日）　研究報告会開催（東京）　参加者：鎌田、山内、藤原、布施、大石、荒牧

以上は国内での実施状況。この他メンバーによる海外学術交流については、2010年12月に掲載発表を行ったポスターを参照されたい。

■研究報告と参加報告

研究報告1）　野外霊長類学や生態人類学の培ってきた行動・生態観察についての手法

山極寿一　話題：「サルは何を食べてヒトになったか」「ヒト科霊長類の進化と社会生態学的多様性」「リチャード・ランガム著『火の賜物　ヒトは料理で進化した』の紹介」

山内太郎　話題：「近代化・都市化―の混乱と食事変化」パプアニューギニア高地フリ語族の農村居住者と都市移住者の比較研究

研究報告2）　日本の食の近代化で「見失ってきたもの」についての考察　鎌田東二　話題：「宮澤賢治」の作品に見る「食」の位置付け、日本人の宗教観、子どもの純正を保つために大人ができること、すべきことへの問題提起

藤原辰史　話題：「食の“質”を問うとはどういうことか」ドイツにおける「かまどHerd」の思想　ナチスにおける食の政策、貧民窟の生活（日本）

松原岩五郎著『最暗黒の東京』の紹介

誰が、どういう資格で人の食の「質」を問うことができるのか

研究報告3）　篠山チルドレンズミュージアムにおいて、「ごんた山と塩むすびワークショップ」を2009年8月の5日間実施した研究データー解析と中間報告　布施未恵子

参加報告1）　センター関与の研究会

矢野智司（京都大学大学院教育学研究科教授）「人間の心を生かす他者としての動物――文学作品を通しての動物――人間学のレッスン」

臨床教育学の立場から、絵本による「こどものこころの形成」を論じる

参加報告2）　海外研究機関との連携・共同研究

荒牧麻子　訪問先「ヨーロッパ味覚科学研究センター」「PARIS味覚研究所」「小学校授業参観」　15カ月に及ぶ子どもの味覚教育に関する比較研究の研究者発表会参加　食教育は①学校の授業、②家庭、③学校食堂の順で効果が認められたとの中間報告があった。

大石高典　訪問先「(A)フランス国立パリ自然史博物館」「(B)リヨン第2大学言語ダイナミクス研究所」「(C)マックスプランク鳥類学研究所人間行動学部門」（渡航・滞在は別財源による）

「中部アフリカ三カ国（カメルーン、コンゴ、ガボン）の熱帯森林地帯に居住するバクウェレ人諸集団の言語、環境利用と食、社会関係と儀礼、遺伝的類縁関係の比較と文化進化」について、フランス、ガボンの研究者らと国際共同研究に関する打ち合わせを行った。

人間行動学的手法により集められた映像資料を用いての世界各地の子どもの食の分配行動の比較研究の可能性について共同研究者と議論を行った。